HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	港の観光空間の創造に関する基礎的研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	加藤, 寛
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	乙第7085号
Issue Date	2019-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76700
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hiroshi_Kato_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）　　氏名：加藤　寛

学位論文題名

港の観光空間の創造に関する基礎的研究

本論文は、かつて人々が行き交う賑わいの空間であった日本の港湾（港、みなと）の多くが、近代とりわけ戦後の高度経済成長期以降に、都市や地域の日常の生活から切り離され、忘れ去られてしまっていることを問題と捉え、それらの港が、改めて、人々が行き交う賑わいの空間、デスティネーション(観光目的地)として選ばれる空間として再興するための一助となることを願い、とりまとめたものである。

本論文は、以下のような日本の港についての基本認識の下に論を進める。まず、近世までの日本では、港こそが人が交流し物や情報が交換される空間（賑わい空間）であり生活圏であった。しかし近代以降、港では貨物輸送におけるターミナル機能が特に重要視され、その経済合理性が追及された結果、人の交流、物の交換の場（空間）は次第に他所に移り、港は都市や地域の日常の生活から切り離され、都市で暮らす人々にとっても、観光でその都市を訪れる人々にとっても、意識されることの少ない空間になっていった。

この状況に対し、昭和 60 年（1985）に策定された長期港湾整備政策において、「生活」に係る機能を港の基本的な機能のひとつとして取り戻すべきとする方針が掲げられ、歴史のある港を中心として人々が集い憩う港空間づくりを目指す動きが進んだ。しかしながら、近代以降の大きな流れは未だ変わっていないのが実情である。

一方で、観光立国に舵を切った日本において、港空間が果たすべき役割に大きな変化が求められている。すでに、港の利用主体が貨物から旅客へと次第にシフトしている傾向が日本の港湾活動の統計からも明らかであり、近年とくに、船舶を利用して日本を訪れる外国人が大きく増え、港を玄関として日本に上陸し、そこで日本の文化や風土に最初に触れるという訪問客が急増している。このことは日本の港の印象が国の第一印象を形成することを意味しており、港がまずもって魅力的であることが求められるが、そうした観点から港湾整備が行われたという話を聞くことはない。これからは、船舶利用客の行き来で賑わうだけではなく、デスティネーションとして訪れる人々で賑わう港空間を創出すべきであることは自明である。

本研究は、都市近傍に立地する港をとりあげ、町の賑わいの場、デスティネーションとなり得る港を実現するための主要な要件と方策について考察することを目

的とする。研究方法としては、先行研究に学んだほか、前近代にまでさかのぼって、研究目的を達成するために有益と考えられる港や町に関する絵画、絵図、写真等に情報を求めた。また、国の内外を問わず、数度にわたって港や港市を現地調査し、それら分析より、都市近傍に立地する港が、町の賑わいの場、デスティネーションとなり得るための主要な要件と方策は以下の 3 点であるとの結論を得た。

第一の点は、日本人が抱いてきた海辺に対する意識についてである。海辺は港空間を構成する主要な要素のひとつであるため、日本の港が賑わいの観光空間になるためには、潜在的来訪者である人々が海辺に対して親近感を抱いていることが必要条件となる。そこで、日本人は古来より海辺に対してどのような感情を抱き美を感じていたのかを知るべく、海辺に対する日本人の感性や美意識を検証した。その結果、前近代の日本人は海や海辺を美の対象と見做し、「海辺の賑わい」に愛着を抱いていた。海を聖なる世界とみなすとともに、陸地と海との間で心理的なギャップを設けておらず、徳川時代の半ばにはすでに海辺の開放空間が存在していたことを絵図等の分析より明らかにできた。つまり、日本人は「賑わいのある港」「デスティネーションとなり得る港」を受け入れる資質を十分保有していることが分かった。

第二の点は、港の内部空間で繰り広げられている観光行動の現状把握とデスティネーションとなり得る港の条件についての考察である。まず、港の入り込み客数は、交通ターミナルとして港を利用する港湾乗降客数を超えており、デスティネーションとなり得る基盤が日本の港には存在していると判断できる。また、現在の日本の港観光は、見ることを中心に行われており、港空間の歴史性や港空間の広大さ、港という場所性を感じさせる要素を港観光の資源として利活用していることが、港観光の特質であることがわかった。また、日本の港では防波堤の保有資産量が多い。その防波堤の先端部（堤頭部）は船舶の入出港を間近に眺める場として、また港と町とを一体として展望する場として高いポテンシャルを有していることを明らかにし、堤頭部の平面形状を 9 分類した上で、デザイン性の高い堤頭形状の現出要件と港の視点場としての堤頭部の利用性との間で強い結びつきがある可能性を指摘し、視点場として有効に利活用する可能性とそのデザイン上の在り方を示すことができた。

第三の点は、港の外部空間との連携強化の方策についてである。港と町の賑わい軸の望ましい連結方法については、西欧 21 港市における町の賑わい軸と港軸の連結パターン分析より、①直交型、②プロムナード型、③平行型、④有機・遠隔型、⑤その他の 5 類型を抽出でき、そのうち、視覚的方向性に安心感がある直交型が港の賑わいづくりに有効であることを示すことができた。また、港と町が互いを身近に感じさせる要素については、港と町の関係が親密であり、心地よい雰囲気を有する港町として定評のある港湾都市レブカ（フィジー共和国）と日本の横浜に関する事例調査により、限られた事例についてではあるが、「繋がっていること」が相互に親しみやすさを覚える基本的な要件であることことを指摘した。さらに「繋がっていること」には「目に見えるものが繋がっていること」および「時間が繋がっていること」があることを示し、事例からは鉄道引込線のレールや歴史的なガス灯のデザインがその重要な役割を果たしていることを指摘できた。